

『懷風藻』所載釈辨正「在唐憶本郷」詩三論

柴 田 清 継

はじめに

大宝年間（七〇一―七〇四）に唐国に遣わされ現地で一生を終えた釈辨正の詩二首―「与朝主人」「在唐憶本郷」―が、『懷風藻』に載っている。それらの詩の解釈について、筆者は今から二十年前に出版されたある論文集所載の拙論の中で論じたことがあり、さらに、今から十三年前に開催されたある研究発表会でも私見を述べたことがある。本稿では「在唐憶本郷」詩の解釈のみに絞って、三たび取り上げ、この作品―特にその前半二句―がこれまで主として我が国でどのように解釈されてきたか、これまでの解釈にどのような問題点があるかについて私見を述べ、最後にこの作品の解釈上のさらなる可能性についても言及したいと思う。

一、筆者の解釈

「在唐憶本郷」の詩句は、「日辺瞻日本、雲裏望雲端。遠遊勞遠国、長恨苦長安」である。

前稿及び前研究発表では、特に重要な前半の解釈のみを論じたが、中でも特に誤ることなく押さえるなければならないのは、「日辺」が、『世説新語』夙惠篇所載の故事に基づき、実は辨正がそのとき居住していた長安を指すべく用いられている点である。この点については、前稿で詳しく述べたので、参照していただきたい。この点さえ

押さえれば、あとは人並みの漢文読解力だけで、詩の意味は読み取れるはずである。

筆者は前稿では訓読や逐語訳は特に提示しなかったが、本稿における以後の論述の必要上、できるだけ前稿で用いた言葉を使って、前半の訳文を作ってみるとすれば、「ここ唐の皇帝のお膝元である長安から、日本の方を眺めやる。雲の中から雲の切れ端を眺めやる。」となる。訓読としては「日辺より日本を瞻、雲裏より雲端を望む」が適当だろうと思う。理解を深めていただくため、前稿の末尾の締めくくりの部分を、ここに転記しておこう。

「日辺」という語は、やや後であるが杜佑の『通典』（八〇一年成立）にも「倭一名日本、自云国在日辺、故以為称」（卷一八五「辺防」一）とあるように、文字面から言えば、日本を指すものとして使ってもおかしくない言葉である。作者はそうした名称の上での類似に着目して機知をはたらかせ、「名称の上では日本がよく似た日辺、すなわち長安にいるのに、やはり本当の日本が恋しくて、日本のあるべき方を眺めないではいられない」といった意味を表して、そこに自身のベソスを滲ませているのである。次に下句であるが、雲の中に包みこまれていれば、実際には雲の切れ端が見えるはずはない。にもかかわらず、その

ように詠んだのは、作者が、古里に帰ろうにも全くそのすべのない閉塞した状況に置かれていることを暗示しようとしているものと見られ、「雲端を望む」という表現を通して、何とかして古里に帰りたいという願望をいっそう強く表明しているものと受け取るべきである。

二、これまでの諸家の解釈

実はその後、二〇〇九年末に上梓された論文の中で、胡志昂氏が「在唐憶本郷」詩の「日辺」について筆者と同じ解釈を示され、訓読も筆者と同じものを記されている。のに気付いた時は、筆者としてはもはやこの問題に口を挟んだり、気に留めたりする必要はなくなつたものと思われた。ところが、胡氏の論以後に発表された書物の中にも首をかしげるような解釈が堂々と記され、しかも、その中には多くの大学図書館や公共図書館の開架書架に置かれているようなものもあることに、あらためて危惧を感じたのである。

ここで、本詩の解釈で管見に入つたものを、前半二句につき時系列で紹介してみよう。

① 鈴木真年（一八三二—一八九四）『懷風藻箋註』（元治二年（一八六五）成立。静嘉堂文庫所蔵）⁴ 最近、土佐朋子の研究により利用することができるようになった。この本は、注文が返り点付きの漢文で記されている。以下のとおりである。（「」の中に書き下し文を示そう。一日辺瞻日本…言吾遠遊日出之辺思望見日本^マ也（「言うところは吾遠く日出づるの辺りに遊び、望みて日本を見んと思ふとなり」）。雲裏望雲端…言遠望雲中望其端^マ也（「言うところ

は遠く雲中を望み其の端を望むとなり」）。

② 沢田総清『懷風藻註釈』（大岡山書店、一九三三年）訓読…日辺日本を瞻 雲裡雲端を望む。通解…日出の辺を思ひ望んでは日本を見、遠く雲中を望んでは雲の端を見る。

③ 編輯者代表藤田徳太郎『日本精神を中心としたる大和時代の文獻』（金星堂、一九三四年）訓読…日辺日本を瞻 雲裡雲端を望む。訳…日出の辺を思ひ望んでは日本を見、遠く雲中を望んでは雲の端を見る。

④ 世良亮一『懷風藻詳釈』（教育出版社、一九三八年）訓読…日辺日本を瞻 雲裡雲端を望む。通釈…日の出づる彼方のはてに遙に日本を見、雲の裏に雲端を望見する。

⑤ 杉本行夫『懷風藻』（弘文堂書房、一九四三年）通釈…太陽の出るほとりに我が故国日本をみて、雲の中に雲の端を眺める。

⑥ 林古溪『懷風藻新註』（明治書院、一九五八年）訳…日の出るあたりを仰ぎ見て、日本を見たいと思ふが、雲の横はつてをる端を見るだけである。

⑦ 小島憲之『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』（岩波書店「日本古典文学大系」69、一九六四年）注解…日の出るほとり（太陽の^{ママ}いる処）に本国（本郷）日本を見、遠く雲の中に雲のはしを望み見

る。日の出るあたりに日本があると思って仰ぎみるが、雲がたなびいているのを見るばかりの意。⁵

⑧高橋庸一郎『懐風藻』詩の解釈に関する二三の可能性」(『甲南国文』第二十八号、一九八一年) 訳…日の本である日本から、遠く離れたここ長安という、日の本からみれば辺疆^{マヤ}の地にあつて、いくら一生懸命、日の本である日本の方を瞻でも(どうしても見えない)。日の本である日本からみれば、まるで雲のまん中にあるようなこの長安の地から、雲の端、即ち雲の切れた所に必ずあるはずの日の、の本つまり日本を見ようと望みみるが、(中略)(やはり見えない)。

高橋氏は⑤や⑦の解釈について「釈文の日本語自体が、その具体的な意味を理解したい。雲の中に雲の端を見るときは一体どういうことなのか」と批評しておられ、筆者も全く同感であるが、しかし、高橋氏自身の解釈も筆者には「その具体的意味を理解したい」。

⑨菅野礼行、国金海二『漢文名作選』5日本漢文(大修館書店、一九八四年) 訳…太陽の出る方角に、なつかしい日本の国を望んで、しばし望郷の思いにひたる。ところが雲のかなたに見えるのは、雲の端ばかりで、その先はなにも見えない。

⑩孫東臨「唐宋時代の中日交往漢詩」(『中国文学論集』(九州大学中国文学会)第十四号、一九八五年) 大意…我在異国的都城遙看故郷日本、透過層層雲彩遙望大海的東辺。

⑪李家正文『文学と伝承の間』(永田書房、一九八七年) 一三一頁 訳…朝日の出たあたりに、生まれ故郷の日本があると思いがら見ている。空逝く雲を見ると、その雲の端に、東は日本、西の端はこの唐の地かと思うばかり。

⑫志水義夫+城崎陽子『上代文学への招待』(ベリかん社、一九九四年) 訓読…日辺日本を瞻、雲裡雲端を望む。注解…太陽の出るあたりに日本を見ようとするが。ただ雲をみるばかり。

⑬中西進『中西進 万葉論集』第八卷(講談社、一九九六年)「在唐の一首」一七七頁 引用・解説…日出する方に故郷を思い、雲の彼方に心を投げかける。そしてわが身を遠く長い客人として見出すのが弁正である。

⑭江口孝夫『懐風藻』(講談社学術文庫、二〇〇〇年) 訳…太陽のほるあたりに故郷日本を見、拡がる雲の果てに思いをよせて仰ぐ。

⑮菅野禮行・徳田武校注・訳『日本漢詩集』(小学館「新編日本古典文学全集」86、二〇〇二年) 訳…東からのほる太陽の方角に、はるかな故郷日本を望み見た。雲の中にまた雲のはしが見やられるばかり。

⑯波戸岡旭「遣唐使人の文学」(『東アジアの古代文化』(大和書房第一二三号、二〇〇五年)…) 日の出るあたりに本国日本があるかと、

遠い雲の中から雲の切れ目を望みやる。

⑰辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院、二〇一二年）訳：日の昇る方の遙かな日本を眺め、雲の中の遙かな雲の端を望むばかり。

⑱鈴木健一『日本漢詩への招待』（東京堂出版、二〇一三年）訳：太陽の出る東の方角に、故国日本があると思つて仰ぎ見る。しかし、雲中に見えるのは、雲の端だけであつた。

以上である。「雲の中の遙かな雲の端を望む」とは、どういう意味であろうか。『懷風藻』の全作品を読破したら、このような訳文が理解できるようになるのだろうか。高橋氏ではないが、「その具体的意味を理解したい」日本語のオンパレードである。筆者が最も重要とした「日辺」の典故に、⑥・⑦・⑨は言及しているのだが、それを解釈に生かしていない。その他、中国語学・中国文学研究者として多くの業績を残した魚返善雄（一九一〇～一九六六）は、著書『漢文の世界』（東京大学出版会、一九六三年）で「在唐憶本郷」詩を取り上げ、「日辺」について「太陽の出るあたり」という語釈のほかに、

また、唐のみやこ長安の別名も「日辺」というから、「はるかに長安から日本を望む」という意味にもなる。

というコメントもつけて、どつちつかずの中途半端な解釈をしている。なお、魚返の訓読は、「日辺日本を瞻 雲裏雲端を望む」で、

第二句に対する注解は「雲のなかにまた遠くの雲のはしが見えている——日本は遠い遠い雲のかたににある」である。

こうなってくると、「人並み」程度の漢文読解の問題も取り上げざるを得なくなってしまう。

三、文言における介詞の省略

介詞とは「中国語で、名詞の前に付き、動詞との関係を示す前置詞。『於』『為』など」のこと（『大辞林』三九五頁）で、これは文言、特に韻文では省略されることが少なくないが、ここでは特に方角・場所を表す名詞の前に付く介詞の省略に絞り、言及しておきたい。このことを取り上げているものには、管見の及んだところでは、呂叔湘（一九〇四～一九九八）の名著『中国文法要略』（一九四二、一九四四年。修訂本は一九五六年）や蔣紹愚氏の『唐詩語言研究』（二〇〇八年）などがあり、いずれも参考になるが、ここでは、王鐔氏の『古典詩詞特殊句法举隅』⁸を取り上げ、本稿の問題を考えるのに有用な叙述を紹介しよう。この書の「二、成分省略 4、介詞的省略」の項で、王氏は、介詞「自、從」は詩詞の中では、「省略し用いないのを常とする」として、十個の例を挙げているが、そのうち、我が国でも比較的馴染み深いであろう三例を転記してみよう。

- (1) 兩岸青山相對出，孤帆一片日邊來。（李白「望天門山」）
- (2) 画図省識春風面，環佩空歸月夜魂。（杜甫「詠懷古跡」）
- (3) 長安回望繡成堆，山頂千門次第開。（杜牧「過華清宮」）

傍線部（傍線は説明の便宜上、筆者がつけた）の意味につき、王氏はそれぞれ「従日进来」「従画図上曾識春風面」「従長安回望驪山」との説明をつけている。我が国の従来の訓読も、(1)と(2)はそれぞれ「日进より来る」「長安より回望すれば」が一般的である。⁹

上記②の沢田など、「日进」の語釈（もつとも、「日出の辺」と解するだけで、「日进」をもつて長安を指し示す典故には気づいていないようだが）に李白の詩句「兩岸青山相對出、孤帆一片日进来」を引いているにもかかわらず、「より」を送る訓読には想到しなかったようである。

四、贅言

古今東西、人間の思想感情には通じ合う部分が少なくない。したがって、外国語や文語で書かれたものの和訳もしくは現代語訳は、多くの場合、自然な日本語を使って行えるものである。自然な日本語に置き換えられていないものは、よほどその国もしくはその時代に特有な思想感情であるか、誤訳であるかのいずれかである。これは、筆者がこれまでの経験を通して会得した、翻訳文に対する見方である。ただ、国が異なり時代が異なれば理解しにくい事柄があるのは当然であって、その場合は、孔子が子路を戒めたように、「蓋闕如」たらねばならない。無理なこじつけや、あてずっぽうの解釈を、公共図書館に置かれるような書物に書くのは、知を求める善良な読者を裏切る行為である。

棚澤龍吉という人¹⁰の『和訳詩集懷風藻』（學燈社、一九七二年）の「後書」に、次のようなことが書かれている。

私の訳業は断続しながら進行していたが、日本古典文学大系本「懷風藻」（昭和三十九年版）が出るに及んで、難解の箇所も小島氏の校註で眼が開かれ、四十二年十二月二十八日、一通り訳了した。（中略）不出来ながら拙訳「懷風藻」は、初め林古溪翁の、後に小島憲之氏のお蔭を蒙っていることをここに明記し、両氏に心からお礼申し上げる。

棚澤氏の訳は、「日出づる処 日の本を 振りさけ見れば 雲の裏 雲のはたてを 仰ぐのみ」というもので、比較的格調のある言葉の滑らかなつながりのおかげで、それなりに脳裏でイメージがつながりはするものの、やはり誤訳であることには変わらない。棚澤氏がこれで満足したのなら、それでいいかもしれないが、頼りにされた専門家、林古溪（一八七五—一九四七）と小島憲之の責任は重大である。

その他、前掲の②と③は、訓読・訳文とも全く同一で、③が②を襲ったと見ていいだろう。こうした安易な踏襲も、前掲の解釈全体を通して目に付くところである。こうした自分自身の「読み」を確立しない、あるいはそれを放棄する態度は、文献を対象や材料とする学問の自滅を招来するだろう。

五、「在唐憶本郷」詩解釈のさらなる可能性

最後に、作品の後半部分も視野に入れ、作品全体の解釈上のさらなる可能性を提案してみたい。

前掲⑤の杉本が「通釈」の後に、この作品は「語戯に堕した結果、諧謔的な情緒が、読者をして微笑せしめる逆効果をなしてはゐない

か」というコメントをつけている。「語戯に墮」すとか、「諧謔的な情緒」とかいうのは、具体的には、小島が言うところの「各句にみえる日・雲・遠・長の同字をそれぞれ使用したたわむれに似た手法」のこと¹¹であろうが、筆者はむしろ、このような表現手法こそがこの作品をきわめて上質なものとした大きな要因であると考ええる。

筆者のこのような見方と同じ方向にあり、かつ理路整然たる説明をしてきているものとして、肖瑞峰氏の叙述¹²があるので、その中国語の原文をここに転記し、さらに和訳して紹介しよう。

『懷風藻』に取められている漢詩作品は）多用対句、表明当時の漢詩作者已有意識地模仿新体詩（即永明体）の格律、追求語言的整飭美（或曰駢偶美）。雖然因功力不足、經驗未稔而時見拼湊痕迹、并常常顯得生硬、造作、呆板、拙劣、却已符合對偶的基本要求、具備了對句的基本形態、而且其中也不乏較為工巧、靈動者、如知名度并不太高的積辨正的《在唐憶本郷》……（ここで詩句が引用されているが、省略する）不僅兩兩相形、以整見勁、而且頗具語言的回環宛轉之美、在當時不失為獨運靈光之作。

和訳…『懷風藻』に取められている漢詩作品は）その多くが対句を用いているが、これは当時の漢詩作者がすでに意識的に新体詩（すなわち永明体）の格律を模倣し、言語の整えられた美しさ（駢偶美ともいう）を追求していたことを物語っている。實力不足、經驗不足のため、時として無理やり対句を作った痕跡が見られ、また、しばしば生硬、不自然、杓子定規、拙劣に感じられる場合がありはするものの、しかし、すでに対偶の基本的な約束事には合致し、対句の基本的な形態は備えており、

中にはかなり精巧で生き生きとした作品もある。例えば知名度がさほど高くない積辨正の「在唐憶本郷」(詩句の引用、省略)は、詩句相互が互いに引き立てあい、(全体の構成が)整い引き締まっているところをその持ち味とし、また、言葉の連環・含蓄の美が非常に豊かであり、当時にあつては、靈妙なる光を放つ作品だったと言いうことができる。

肖氏言うところの「詩句相互が互いに引き立てあ」う緊密な構成を、作者積辨正自身が意識的に目指して、この作品を作ったに違いないという方向へ、我々の解釈をさらに推し進めていくとするならば、作品の第三、四句についてももう少し「深読み」ができるかもしれない。

第四句については、「長恨」と「長安」とを緊密に連関させ、長く安らかに暮らせるはずの長安で皮肉なことに千古の遺恨を抱いて苦しむことになったとする解釈が、前掲の①②⑥の注解の中に明記されており¹³、あるいは明記せずとも自明のことと言ってもよいかもしれない。では、第三句についても、「遠遊」と「遠国」との間にもっと緊密な連関を想定することができないだろうか。つまり、遠くへ出かけることに胸を膨らませてやってきたのに、苦勞する結果に陥ってしまった、換言すれば、ここの「遠遊」という語が、遠くへ出かける不安などではなく、それとは正反対の意味合いで使われているのではないかという想定である。

直ちに想起される「遠遊」の用例としては、例えば『論語』里仁篇の「父母在、不遠遊。遊必有方」などもあるが、筆者は「楚辭」遠遊篇で表現されているような意味合いでの「遠遊」を想定すれば、

期待と結果の明暗が一層際立ち、表現として効果的なものになるのではないかと思う。すなわち、『楚辞』遠遊篇は、苦しみ多い俗界を逃れたいと願った主人公が、仙人の王子喬の教えにより、自由自在に天界を遊行し、登仙するというストーリーの作品である。釈辨正が渡唐前の日本での生活を苦しいものと感じていたかどうかは別として、唐での生活に神仙世界への飛翔にもたとえられるほどのあこがれを抱いて渡ったにもかかわらず、散々な苦勞をする羽目になったという解釈である。

全四句のうち、第一、二、四句のそれぞれ内部に言葉と言葉との緊密な相応関係が見て取れる以上、第三句の内部にも同様のものが仕組まれていてもおかしくないという想定を試してみたまでのことである。

おわりに

以上、本稿では『懷風藻』所載の釈辨正の「在唐憶本郷」詩の解釈をテーマとして取り上げ、この作品がこれまで主として我が国でどのように解釈されてきたか、これまでの解釈にどのような問題点があるかについて私見を述べ、最後にこの作品の解釈上のさらなる可能性についても言及した。

「在唐憶本郷」詩の解釈はもちろんのこと、何らかの形でこの作品に言及した論著で、管見に入ったものごとく収集して検討したが、ここまでの論述では取り上げなかったものもあるので、それらの論著名を次に列挙しておく。

◎ 釈清潭『懷風藻新釈』（丙午出版社、一九二七年）。◎ 武田

祐吉編、校註日本文学類聚『上代文学集』（博文館、一九二九年）。◎ 中山泰昌編『校註日本文学大系』二十四『懷風藻』（誠文堂新光社、一九三八年）。◎ 山岸徳平『日本の漢文学』（『日本漢文学講座』第一巻、河出書房、一九五五年。後に山岸徳平著作集Ⅰ『日本漢文学研究』（有精堂、一九七二年）収録）。◎ 緒方惟精『日本漢文学史講義』（評論社、一九六一年）四十四、四十五頁。◎ 小島憲之『萬葉以前』（岩波書店、一九八六年）八十八、八十九頁。◎ 田村謙治『遣唐使』（万葉夏季大学第12集『万葉集の周辺』、笠間書院、一九八五年）一〇二頁。◎ 神野志隆光・坂本信幸企画編集『セミナー万葉の歌人と作品』第十二巻『万葉秀歌抄』（和泉書院、二〇〇五年）二十六頁。◎ 藏中進『大唐への道——山上憶良「在「大唐」時、憶「本郷」作歌」の周辺——』（高岡市万葉歴史館編『高岡市万葉歴史館論集9「道の万葉集」』、笠間書院、二〇〇六年）三四〇～三四一頁。

読者諸賢におかれては、ほかにもお気づきの関連資料があれば、ぜひご教示いただきたい。

注

1 拙稿『「懷風藻」所載釈辨正の詩二首の解釈』、『武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集』、和泉書院、一九九九年。『渡唐留学僧釈辨正の漢詩二首の解釈について』、和漢比較文学会・台湾大学共催特別研究発表会、二〇〇六年。

2 「日辺にて日本を瞻、雲裏にて雲端を望む」でもいいと思う。

3 胡志昂「最盛期の遣唐使を支えた詩僧・釈弁正」(『埼玉学園大学紀要(人間学部編)』第九号、二〇〇九年十二月)、『古代日本漢詩文と中国文学』(笠間書院、二〇一六年二月) 第五章に収載。

4 土佐朋子『静嘉堂文庫蔵『懷風藻箋註』本文と研究』(汲古書院、二〇一八年)。

5 小島は、これより三十年後に出版された校注『本朝一人一首』(岩波書店『新日本古典文学大系』63、一九九四年)の中でも、「在唐憶本郷」詩に注を付けているが、内容に変化はない。

6 拙訳・私は異国の都で(にいて)はるかに故郷の日本の方を見、折り重なる雲を透かしてはるかに海の東の方を眺める。

7 呂叔湘『中国文法要略』(商務印書館)第十二章「方所」「不用関係詞連係」、蔣紹愚『唐詩語言研究』(語文出版社)第三章「唐詩的句法」第二節「唐詩的省略」。

8 王鐸『古典詩詞特殊句法举隅』、新華出版社、一九九九年。

9 なお、我が国でも文言における介詞の省略はつとに言及されている。筆者が気付いたところでは、広池千九郎述『支那文典』(早稲田大学出版部、一九〇四年)六三四、六三五頁、森慎一郎『新撰漢文典』(六合館、一九一一年)五四四頁)。

10 著者略歴によると、一九〇四年の生まれで、「佐藤春夫先生に小説と漢詩和訳を学」んだという。

11 前掲⑦所携書九十八頁頭注。

12 肖瑞峰『日本漢詩発展史』第一卷(吉林大学出版社、一九九二年)第一編第二章第三節「懷風藻」的藝術形式及其局限」一五四―一五五頁。

13 それぞれ次のようにある。①(訓読のみにする)。「言うところは唐の都は長安と名いふも、吾其の土に苦しみ、身都名の如くならず」。

息して長安に苦しんでゐる。誠に、長安といふ名に相応しくない」。

⑥「心配苦勞し、長恨(絶えざる残念さ)で、長安に苦しんでゐる。安ではない、恨である」。

(しばた・きよつぐ 本学名誉教授)